

Title	公立中学校の英語授業におけるジョリーフォニックス導入実践
Sub Title	Practical implementation of Jolly phonics in English classes at public junior high schools
Author	武石, 裕子(Takeishi, Yuko)
Publisher	慶應義塾大学外国語教育研究センター
Publication year	2025
Jtitle	慶應義塾外国語教育研究 (Journal of foreign language education). Vol.21, (2024.) ,p.27- 54
JaLC DOI	
Abstract	In this practice, 42 basic sounds of Jolly Phonics, an integrative phonics system, were taught through band activities in each hourly class. Jolly Phonics has been introduced in many schools in the UK to help students acquire the correspondence between sounds and letters, which is an important foundation for learning English. This learning method has a set teaching sequence of review, stories, actions, letter practice, sound comprehension, blending and dictation. There are examples of its use in elementary schools in Japan, but few in junior high schools. To assess its effectiveness, students completed the same task before and six months after the study. Additionally, English vocabulary and grammar outcomes were compared with those of students in previous years who had not been taught using Jolly Phonics. Based on these results, along with student questionnaires, this paper examines the impact of introducing multisensory Jolly Phonics in junior high school English classes.
Notes	調査・実践報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12043414-20240000-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

公立中学校の英語授業における ジョリーフォニックス導入実践

武 石 裕 子

Abstract

In this practice, 42 basic sounds of Jolly Phonics, an integrative phonics system, were taught through band activities in each hourly class. Jolly Phonics has been introduced in many schools in the UK to help students acquire the correspondence between sounds and letters, which is an important foundation for learning English. This learning method has a set teaching sequence of review, stories, actions, letter practice, sound comprehension, blending and dictation. There are examples of its use in elementary schools in Japan, but few in junior high schools. To assess its effectiveness, students completed the same task before and six months after the study. Additionally, English vocabulary and grammar outcomes were compared with those of students in previous years who had not been taught using Jolly Phonics. Based on these results, along with student questionnaires, this paper examines the impact of introducing multisensory Jolly Phonics in junior high school English classes.

はじめに

これまで「生徒が生き生きと笑顔で英語を用いて海外の人とコミュニケーションをとる姿」を目標に、中学校英語科教員として様々な実践に取り組んできた。2011年度の小学5、6年生における「外国語活動」の必須化以降に入学してくる生徒は、授業で緊張する様子も見られたが、授業の内外でALTと楽しくコミュニケーション活動をしたり、笑顔でやり取りしたりする様子もあり、小学校で英語に慣れ親しむことの大切さを感じていた。そして、2020年度には小学校の5、6年生で英語が教科となり、2022年度には英語を教科として2年間学んだ生徒が初めて中学校に入学してきた。

『小学校英語に関する調査研究』（ベネッセ教育総合研究所（2023））¹⁾という報告がある。この調査研究報告では、学習指導要領の移行措置期間である2019年度以降と、全面実施後の

2021年度を比較している。スコア型4技能テスト（GTEC junior2）における英語力スコア・グレードを比較すると、移行措置期間に学んだ小学校6年生より全面実施後に学んだ6年生の方が、トータルスコアでグレード3とされる Junior Primary Level（決まって表現を自分なりに使い始めるレベル）から、グレード4とされる Junior Intermediate Level（なじみのある英語を使えるようになるレベル）へ上がっていた。「聞く力」のみ2019年度段階でもグレード4だったが、2021年度にはその他の3つの力、「読む力」「書く力」「話す力」の全てがグレード4へ上がり、トータルスコアでも1つ上のグレードに上がったわけだ。なお、各技能のグレード4の CAN-DO は表1の通りである（『小学校英語に関する調査研究』（2023）をもとに筆者が作成）。生徒の意識に関しても、2019年度の小学校6年生より、2021年度の6年生の方が授業の理解度も高く、英語嫌いの生徒も増加していなかった。この調査だけですべてを断定することはできないが、小学校での教科としての英語教育が着実に成果を挙げている面があるということは言えよう。

表1

読む	書く
友だちからの英語で書かれたメッセージ（メモや携帯メッセージ）などを読んで、待ち合わせの時間や場所などが分かる。 英語で書かれた友だちの自己紹介などについて文を読んで、友だちの趣味や得意なことが理解できる。	自己紹介文を書くときに、趣味や得意なことについて具体的に、英語で2文程度で書くことができる。 “go to the park”（公園に行く）、 “play the piano”（ピアノをひく）など、自分のやることをメモに書くことができる。
聞く	話す
買い物や食べ物を注文するときに、何が欲しいか、いくつ欲しいかなどを店員に英語で聞かれ、その質問がわかる。 友だちがなりたい職業とその理由 “I want to be a pilot.”（私はパイロットになりたいです。） “I like airplanes.”（私は飛行機が好きです。）についての話がわかる。	“I want to go to Italy. I like pizza.”（私はイタリアに行きたいです。私はピザが好きです。）など自分の行きたい国やなりたい職業などについて、理由を付け加えて伝えることができる。好きな食べ物やスポーツなどについて、相手に質問をしたり、自分のことを伝えたり、簡単なやり取りを続けることができる。

2022年度に勤務先の中学校で迎え入れた英語を教科として2年間学んだ生徒たちに対して、例年の授業開きで恒例となっているやり取りの活動や自己紹介をさせたところ、例年よりもスムーズに活動が進んだ。やはり英語を「教科」として2年間学んだ成果は大きいと感じ、授業内容をレベルアップしたり、新たなチャレンジができたりするのではないかと期待が高まった。ところが、翌日の授業後に、ある生徒から自習学習ノートを受け取り、その中の質問に技能テストだけでは見えてこない問題があることに気付かされた。その生徒の質問は、「質問が

3つあります。1つ目は英語はどうやって読めばいいんですか。ローマ字は読めるけど英語は読めません。2つ目は、英語はどう書けばいいんですか。そして3つ目は、例えばどうして、バスタイムを bath と書くんですか？他にも分からないのがたくさんあります。(原文まま)」という内容であった。ここ数年、「ローマ字＝英語」と捉え、どうして英語とローマ字の書き方は違うのか、ローマ字の書き方ではなぜダメなのかと聞かれることは多くあった。しかし、まだ2回しか会っていない、そして英語を「教科」として2年間学習してきた生徒からこのような質問が出たことに事の重大さを感じた。

生徒から「ローマ字は読めるけど英語は読めない」、「英語はどう書けば良いのか」と切実な悩みが上がる実態を踏まえ、コミュニケーション活動の土台となる英語特有の音と文字との対応関係を学ばせる必要があるのではないかと考えた。そこで、すでに指導法として実績があり、授業カリキュラム自体への影響も最小限で導入できそうなジョリーフォニックスの存在を思い出した。本稿は、英語を「教科」として小学校で2年間学習してきた中学校1年生のクラスに、ジョリーフォニックスを導入し実践を行った記録と初歩的な分析の報告である。

1. 実践の背景と指導法の選定

ベネッセ教育総合研究所(2023)によると、学校調査に回答した45校のうち、2021年度に小学校6年生の英語授業でよく行っていることの上位3つは「単語や短い文を英語で言う練習をする、先生や友達が英語で話すのを聞く、教科書の英語音声聞く」である。音と文字との対応関係を学ぶフォニックスに関しては、「よく行っている」が13校、「ときどき行う」が21校、「あまり行わない」が10校、「まったく行わない」が1校である。それに対して「アルファベットの読み書きをする」を「よく行う」が11校、「ときどき行う」が31校、「あまり行わない」が3校である。このことから、小学校では英語におけるアルファベットと音の対応関係を習得すると同時に、日本語の音韻感覚にもとづいたアルファベットの読み書きも行われていることが推測できる。日本語の音韻感覚やローマ字を頼りに英単語を聞いたり、書いたりする素地が少なからず存在していると考えられる。英語と日本語の関係について、入山ほか(2019)に、次のような指摘がある。

英語は日本語より微細で複雑な音韻体系を持つため、日本語を母語とする英語学習者には文字と音との規則的な結びつきの取得が困難なことが考えられる。例えば、“take”はローマ字表記の通りでなく、「テイク」と発音するなど、日本語の仮名のように文字の名前と発音が一致していない。²⁾

これはまさに先述の生徒からの質問に一致する内容である。英語の音と文字の関係に蹟いて

しまう生徒がいるのと同時に、顕在化することが少ないとは言え、疑問を持ちながらひたすら繰り返し書いて丸暗記して学習を進めている生徒がいることも容易に想像できる。では、どうすればこの英語学習の壁をよりスムーズに乗り越えることができるだろうか。次の湯澤ほか（2010）と入山ほか（2019）の指摘が参考になる。

日本語を母語とする子ども達は、既に幼児期段階で英語の音韻処理に日本語の音節（モーラ）の影響が明確に現れており、単に英語音声に触れるだけでは、日本語より複雑な音韻体系を持つ英語の音韻習得は困難で、日本語母語話者の音韻処理の特徴に応じた学習方法が必要である。³⁾

母語が日本語でも、英語の音素を聞いてそれをアルファベットに変えることができるようになると、音素をつないで単語が読めるようになり、単語の発音を聞いてスペルが書けるようになると考えられる。そしてこのことが、中学生達の初期の英語学習の躓き防止に繋がる可能性が高い。この、英語の音素とアルファベット、つまり、音と文字の結びつきの指導する方法のひとつに統合的フォニックス（synthetic phonics）が挙げられる。⁴⁾

さらに村上（2015）は、リテラシー発達の概念図（図1）を用いて、最下位に位置する文字の認識（print awareness）、音韻の認識（phonological awareness）、そして両者をつなぐフォニックス（phonics）といった基礎的基盤の重要性を指摘している。⁵⁾

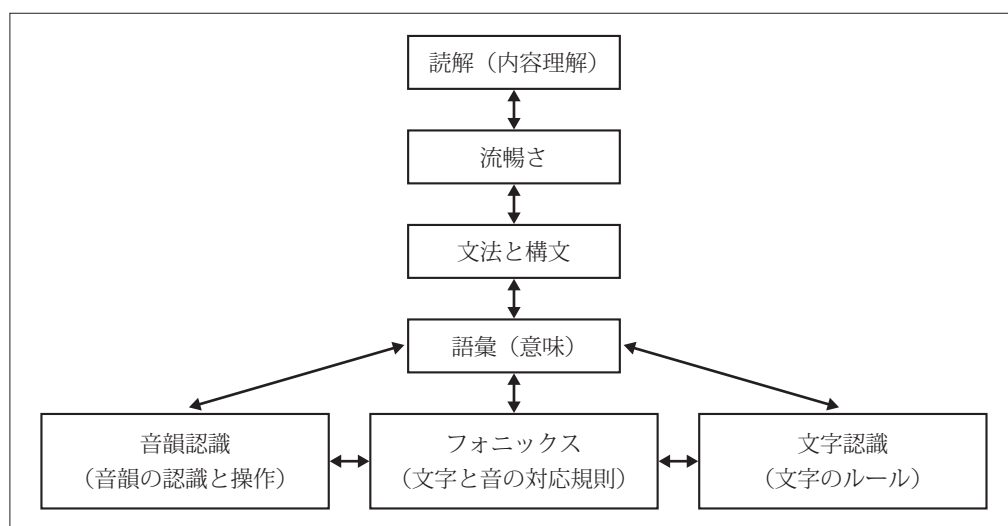


図1 リテラシー発達の概念図

以上のことから、英語学習の重要な基盤となる音と文字との対応関係を習得させるために、限られた条件の中で導入可能な指導方法を検討することになった。その中で、イギリスの学校で多く取り入れられているジョリーフォニックス（多感覚シンセティック・フォニックス）が、実践可能な指導法として候補に挙がった。

2. ジョリーフォニックス（多感覚シンセティック・フォニックス）について

ジョリーフォニックスとは、多感覚を用いて音と文字の結び付きを学ぶ統合的フォニックスの1つである。統合的フォニックスとは、入山ほか（2019）によると次のように説明される。

統合的フォニックスとは、読みの導入段階から単語全体の発音を要求するのではなく、まずは音素単位で文字と音の関係を構築し、その後それらを組み合わせて初めて単語としての音声化を求める英語の指導法である。⁶⁾

さらにジョリーフォニックスについても、次のように述べている。

ジョリーは音素を表現する手段として文字、絵、動作、歌など多様な手段を用いて単語の音を分割したり、複数の音素を結合させて単語と音声に統合したりする活動を行う。単調で機械的に「繰り返し読んで書いて暗記する」という学習法ではなく、視覚、聴覚、運動覚、触覚などを用いた他側面からのアプローチであるため、子どものさまざまな認知特性にも幅広く対応できると考えられる。さらに、日本語での指導形態が確立されており、指導の際は日本語で教えることができ、現場にも導入しやすい。⁷⁾

この指導プログラムについて、入山ほか（2020）は以下のように説明する。

JP（ジョリーフォニックス）は、英語の基本となる音素42音を7グループに分け、音と文字を対応させながら習得を促す系統的な指導プログラムである。ステップの概要としては、最初の3音の学習が終了した時点ですぐに3つの音と文字を組み合わせる単語を読む活動を導入する。例えば、「s (/s/)」、「a (/æ/)」、「t (/t/)」という3つの文字と音の学習が終了したところで、これら3音を結合させて「sat (/sæt/)」と言う単語を発音する練習を行う。このプロセスを「ブレンディング (blending)」と呼ぶ。さらに、単語に含まれる音を識別して分割し、それぞれの音に対応する文字を書く活動も同時並行的に行い、音素の認識を高めていく。例えば、「sun (/sʌn/)」という音を聞いて、そこに含まれている音（音素）を聞き分けて /s/、/ʌ/、/n/ という3つの音に分割し、「s-u-n」という3つの文

字に分けて書く。このプロセスを「セグメンティング (segmenting)」と呼び、これらの結合、分割の活動を通して明示的に音と文字の繋がり の習得を支援していく。⁸⁾

基本となる音素は42音だが、それらが達成された後には同音異綴りと不規則な単語の綴りの学習へと進むが、本実践では基本となる42音のみを取り上げた。ジョリーフォニックスの指導効果検証を行った先行研究としては、入山ほか (2019) があり、公立中学校1・2年生を対象として短期間集中の指導を行い効果が認めらたと報告されている。

3. 実践の内容

3.1 対象

今回の実践の対象となったのは、公立中学校である新潟市立石山中学校1年生の1組と4組である。学校は新潟市の東区に位置し、1年生から3年生まで各4クラスと特別支援学級2クラスの中規模校である。2クラスとも授業中は発言も多くコミュニケーション活動にも積極的に取り組んでいる。しかし市内の他地域と比べると経済的に苦しい家庭が多く、家庭学習の習慣が身につけていない生徒が多い。そのため学習内容が積み重ならず、校内の定期テストでもテスト作成時に想定する平均点に届かないことが多い。2022年4月に行ったNRT (数研式標準学力検査) では英語の偏差値は51.4、5段階分布状況では評定5が11人、4が26人、3が56人、2が23人、1が5人だった。全国平均を100とした領域別正答率では「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」では全国平均を上回っていたが、「書くこと」では89と全国平均を下回っていた。その中でも「語順や字間を意識して書くこと」が84、「自分に関する英語を書くこと」が41と全国平均を大きく下回った。この「自分に関する英語を書くこと」に関しては全国の正答率も17.5%と低く、ここからは小学校終了段階ですでに「自分に関する英語を書くこと」に苦手意識をもつ生徒が多いと考えられる。

3.2 実践の方法と生徒の反応

週に4時間ある英語授業の帯活動として15分程度で、ジョリーラーニング社の『はじめてのジョリーフォニックス』⁹⁾を用いて基礎となる42音を毎時間1音ずつ取り組んだ。毎時間の進め方は、『はじめてのジョリーフォニックス』に基づき、「①音の復習、②おはなし、③アクション、④文字指導、⑤音の聞き取り、⑥ブレンディング、⑦ディクテーション、⑧歌」の流れで進めた (図2参照)。



図2 『はじめてのジョリーフォニックス』の一例

生徒が進め方とその日に学習する音、そしてそれまでに学習してきた音を確認できるように、教員が内容をまとめて再構成した資料をラミネートし、毎時間黒板の左側に貼った。

図2を参考に実際の生徒の活動を紹介する。「①音の復習」では、その時間までに学習した音を動作とともに教師主導でリズムカルに発音していく。「②おはなし」では図2の左上にある図を大きくモニター画面に写し、教師が日本語で生徒に何が見えるか聞き、それを英語で言ったり英語では何と言うか生徒に尋ねたりしながらその日に学習する音を少しずつ聞かせていく。生徒とのやりとりは表2の例のようになる。

表2 「②おはなし」での生徒とのやりとり

- T: 何が見えるかな。
 S: 蛇!
 T: 蛇は英語で何と言うか知っていますか。
 S: snake!
 T: そうですね、s(sの音を強調しながら) nake ですね。他には何が見えますか。
 S: 太陽!
 T: 太陽は英語で何と言うか知っていますか。
 S: sun!
 T: そうですね、s(sの音を強調しながら) un ですね。他には何が見えますか。
 S: spider もいる!
 T: よく気がつきましたね。蜘蛛は spider ですね。よく知っていましたね。

他にも気づかせたい snail や sand など s がつく言葉にも注目させていくうちに、生徒はその日に習う音に自然と気がついていく。「③アクション」では、s の音を発音しながら手で大きく蛇 (snake) の形を空書きしていく。最初の数回は教師が手本を見せ、その後に生徒と一緒に動作をしながら音を発音する。次に「④文字指導」では、生徒は発音をしながらワークシートに s の文字を書く。⑤から⑧までは『はじめてのジョリーフォニックス』に付属している CD を用いながら進めていく。「⑤音の聞き取り」では、s が含まれた単語と含まれていない単語を聞き、生徒は s があるかないかを判断していく。「⑥ブレンディング」では、s と他の音を組み合わせるとどのような単語になるのかを音で確認していく。ここでは /s/i/t と言う 3 音を 1 つずつ組み合わせて sit になることを確認した。「⑦ディクテーション」では 1 音ずつ発音される音を聞いて単語にしていく。ここでは /s/i/t を聞いて生徒が自分で sit と書いていく。最後の「⑧歌」では s の音が含まれた短い音楽を 2 回聞く。1 回目では s がどこに出てくるか聞き取るように指示し、2 回目では s の音が聞こえたら音楽に合わせて動作をする。

これらの活動の中で、特に生徒に人気が高いものは「②おはなし」と「⑤音の聞き取り」である。「②おはなし」では絵を見せただけで知っている単語を大きな声で言ったり、ジョリーフォニックスのマスコットキャラクターである蛇のスネイクとネズミのインキーがどこにいるかを探したりと楽しんでいる。さらに主人公の名前の最初の音がその日に学習する音で始めると気づいてからは、主人公の名前を予想して当たり外れを楽しむ姿も見られた。英語圏の人名に関しては生徒には馴染みが薄く、なかなか知る機会がないので貴重な機会となっていた。また、このように「②おはなし」の中にはイギリスの文化に関する話がたくさん含まれていて、自然と海外の文化にも慣れ親しむことができる利点もある。この図 2 の例で言えば、生徒は太陽の色の違いを考えることができた。「⑤音の聞き取り」は、ワークシートを見て音を聞く前からその音があるかないかを予想して発言をしていた。初めのうちは日本語との音韻の違いで何音目にその音があるのかが難しいが、徐々に数え方にも慣れていく姿が見られた。またその音を含む様々な単語がイラストとともに出てくるので、自然と分かる単語が増えていった。

4. 効果の検証と分析

4.1 検証・分析方法

効果を検証するために、新潟大学教育学部の加藤茂夫教授から提供していただいた課題を用いて 2 通りの分析を行った。1 つ目は、実践前のプレテストと実践終了から半年経った 3 月に行ったポストテストである。内容は、「音かぞえ課題」「音くらべ課題」「無意味語課題」「基礎音課題 (以上 4 課題は表 3) と文法問題課題 (表 4) の 5 課題である。文法問題課題は、文法の正しい文だと思ったら文末の () 内に「○」印を、正しくないと思ったら () 内に「×」印を書き入れ、「×」を書き入れた文については間違っていると思った部分に下線を引く

ものである。また「○」か「×」か判断できない（よく分からない）場合には、（ ）内に「？」を書き入れさせた。

表3 4課題の内容

課題	内容	解答
音かぞえ課題	聞こえてくる言葉はいくつの音でできているかを数えて数字で答える。	ep（2音）、bis（3音）、foy（2音）、daspog（6音）、yont（4音）、udpon（5音）、minlan（6音）
音くらべ課題	2つのことばの発音が同じと思ったら「○」を、違うと思ったら「×」を回答欄に書き、うまく聞き取れなかった時や、わからなかった時には何も書かない。	team-team（○）、chat-chet（×）、rink-link（×）、sheep-sheep（○）、toy-tow（×）、cute-cute（○）、van-ban（×）、wane-wine（×）、play-play（○）、catch-cash（×）
無意味語課題	聞こえてくる言葉について、思った通りにアルファベットで書く。聞き取れても書き方がよくわからなかったら『？』（はてなマーク）を、聞き取れなかった時には何も書かなくて良い。	ab, es, og, un, id, nul, dep, pos, ruk, thim, not, mout, yied, clom, plud
基礎音課題	聞こえた音を思った通りにアルファベットで書く。聞き取れても書き方がよくわからなかったら『？』（はてなマーク）を、聞き取れなかった時には何も書かなくて良い。	s, i, p, n, c/k/ck/, h, r, m, u, l, f, i, ie, ng, y, oo, sh, th, ou, er

表4 文法問題課題

- How is the weather today? – It's sunny! () - Is this your bag? – No, it's Ken. () - Do you like to play baseball? – Yes, I am. () - What time do you get up every day? – I get up at seven. () - Where is your house? – It's in Nagaoka city. () - How many book do you have? – I have twenty books. () - Does Ken play the violin? – Yes, he does. () - Takashi can plays the piano. () - I talked with my friends about my dream yesterday. () - What is Ken doing? – He is studies math now. () - Where do you want, a new bicycle or a new game soft? () - What did Ann do yesterday. – She played basketball with her friends. () - Don't play the guitar in this room. The baby is sleeping. () - Who notebook is this? – It's mine. ()
--

15. Why do you like Jane? – Because she is very kind. ()
16. How many is this pen? – It's 500 yen. ()
17. Last year, I visited at Kyoto with my family. ()
18. Can you help me with English homework now? ()
19. What are these? – These are the pictures of my family in England. ()
20. He always studies English on Sunday. ()

2つ目は、表3で示した4課題と「文法問題課題(表4)」について、本実践でジョリーフォニックスを行った1年生が3年生(2022年度)になった時と、ジョリーフォニックスを実施していない2年前(2020年度)の3年生の結果を比較した。調査はどちらも3年生の12月に実施した。

4.2 結果の分析

(1) プレテストとポストテストの正答率の比較

① 音かぞえ(表5、図3)

表5 音かぞえ正答率表

正答率	1. ep	2. bis	3. foy	4. daspog	5. yont	6. udpon	7. minlan
プレテスト	0.13	0.48	0.00	0.13	0.43	0.27	0.15
ポストテスト	0.33	0.65	0.02	0.51	0.81	0.23	0.51

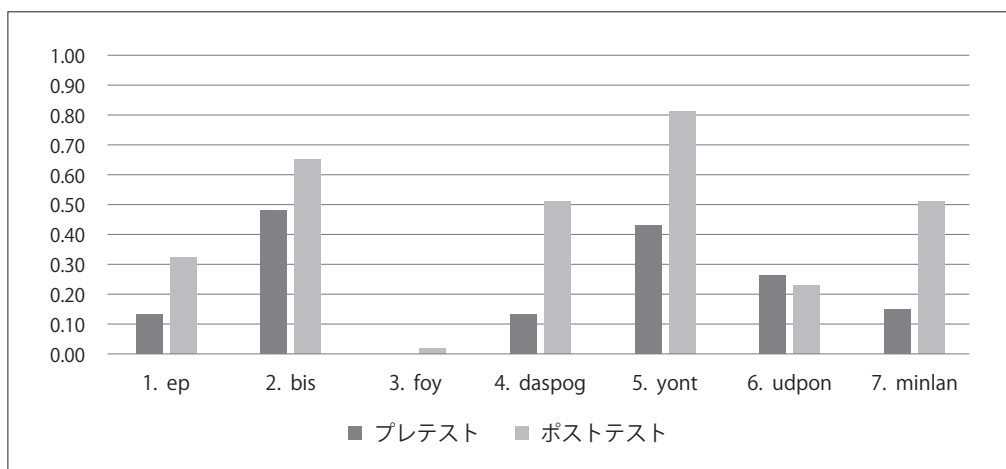


図3 音かぞえ正答率グラフ

音かぞえ課題では、ポストテストがプレテストを下回ったのは7問中1問しかなかった。しかし foy に関してはプレテストとポストテストの両方で正答率が低く、正解者はプレテストで0名、ポストテストでも1名だった。foy は /f/oy(oi)/ となり、ローマ字の知識を活用しても「フォイ」となるので2音と解答しそうだが、生徒の答えを分析すると3音、4音、5音と解答した生徒が多かった。この誤答の3つの音数に関してさらに見ていくと、プレテストとポストテストでは割合が変化している。プレテストでは3音と解答した生徒が53%、4音と解答した生徒は30%、そして5音と解答した生徒は17%だった。それがポストテストでは3音と解答した生徒が20%、4音と解答した生徒は61%、そして5音と解答した生徒は20%だった。同じ不正解でも解答している音の数に変化があることは興味深い。3音と解答した生徒は /f/o/y/ と数えたことが予想され、4音と数えた生徒が /f/ を /h/u/ と2音に数えたのでないかと考えられる。

同様にポストテストの正答率の方が低かった updon について分析する。updon は /u/p/d/o/n/ と5音になるが、4音、6音、7音の間違が多い。プレテストでは4音と解答した生徒が33%、6音と解答した生徒は27%、そして7音と解答した生徒は8%だった。それがポストテストでは4音と解答した生徒が10%、6音と解答した生徒は56%、そして5音と解答した生徒は12%だった。プレテストで4音と解答した生徒が多いのは、ローマ字読みをすると u/p/d/o/n/ となるからであると考えられる。ポストテストになると /d/ を /do/ と読む生徒が減り、その代わりに /d/ を /d/u/ と分解した生徒が増えて6音という解答が増えたのではないかと考える。この foy と updon の分析から、「母音+子音」という日本語を英語で表すローマ字の影響を強く受けていると考えられる。

ローマ字が英語学習に及ぼす影響については松浦（2005）が参考になる。「ローマ字の書き方ではなぜダメなのか」という質問を生徒からされてきた経験上、ローマ字は英語学習にとって障壁になると思っていた。しかし松浦（2005）によると、ローマ字力は英語の筆記学習開始後3ヶ月程度は強いプラスの影響を及ぼし、その影響は時間とともに少なくなるが持続するという研究もある¹⁰⁾。『小学校学習指導要領外国語活動・外国語編』では、ローマ字の扱いについて以下のように述べている。¹¹⁾

第3学年の国語科において日本語のローマ字表記を学習することとなっているが、指導にあたっては、「ローマ字のつづり方」（昭和29年内閣告示）を踏まえることとなっている。ここでは、「一般に国語を書き表す際には第1表に掲げたつづり方によるものと」し、「従来の慣例をにわかに改めがたい事情がある場合に限り、第2表に掲げたつづり方によっても差し支えない」とこととされている。国語科においては、第1表（いわゆる訓令式）により、日本語との音が子音と母音の組み合わせで成り立っていることを理解すること、第2

表（いわゆるヘボン式と日本式）により、例えばパスポートにおける氏名の記載など、外国の人たちとコミュニケーションをとる際に用いられることが多い表記の仕方を理解することが重視されている。

このように『小学校学習指導要領外国語活動・外国語編』では「日本語のローマ字表記」と明記しているが、小学生にとっては、初めてアルファベットを用いて書くものは英語として捉えられている可能性がある。第二外国語として英語を学習する日本人にとって、小学校でローマ字を習得できるかどうかはその後の英語学習に影響を与える。このことを意識して小学校でもローマ字学習を進めるべきであるが、この点については稿を改めて論じたい。

② 音くらべ（表6、図4）

表6 音くらべ正答率表

正答率	1. ○ (team-team)	2. × (chat-chet)	3. × (rink-link)	4. ○ (sheep-sheep)	5. × (toy-tow)
プレテスト	0.93	0.95	0.63	0.92	0.97
ポストテスト	0.98	1.00	0.53	0.98	0.98

正答率	6. ○ (cute-cute)	7. × (van-ban)	8. × (wane-wine)	9. ○ (play-play)	10. × (catch-cash)
プレテスト	0.98	0.95	0.97	0.97	0.93
ポストテスト	0.98	0.86	1.00	0.93	0.98

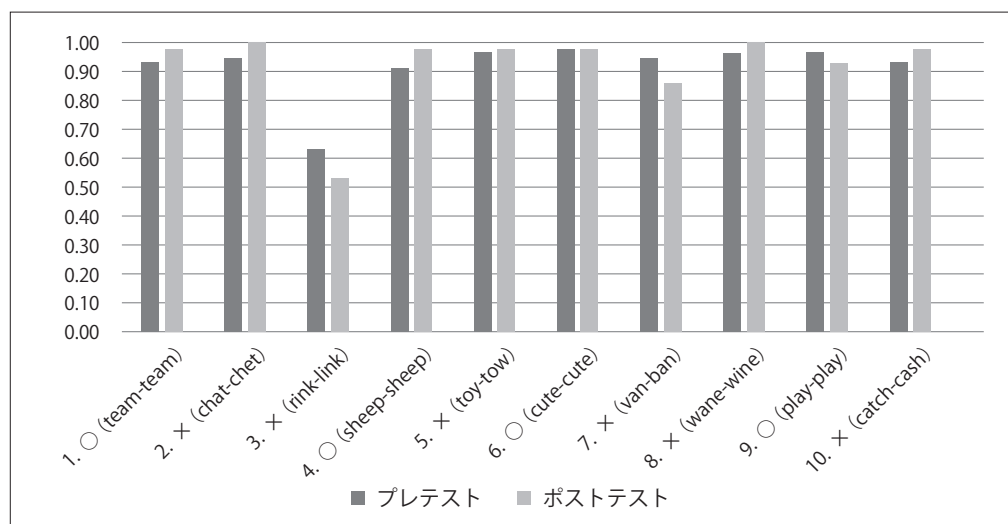


図4 音くらべ正答率グラフ

音くらべ課題では、ポストテストがプレテストを下回ったのは10問中3問だった。そのうち2つは rink-link、play-play と日本人が苦手とする r と l の聞き分けである。そしてもう1つは v と b の聞き分けで、両方とも日頃授業をしても生徒にとって聞き分けが難しいと感じるものである。今回の結果を参考に、今後この4つの音を扱う際は、他の音以上に音や発音の仕方に意識をさせていく。

③ 無意味語（表7、図5）

表7 無意味語正答率表

正答率	1. ab	2. es	3. og	4. un	5. id
プレテスト	0.00	0.30	0.45	0.02	0.00
ポストテスト	0.16	0.67	0.30	0.23	0.16

正答率	6. nul	7. dep	8. pos	9. ruk	10. thim
プレテスト	0.00	0.30	0.53	0.02	0.02
ポストテスト	0.05	0.84	0.91	0.00	0.05

正答率	11. noot	12. mout	13. yied	14. clom	15. plud
プレテスト	0.08	0.00	0.00	0.02	0.02
ポストテスト	0.23	0.12	0.05	0.21	0.02

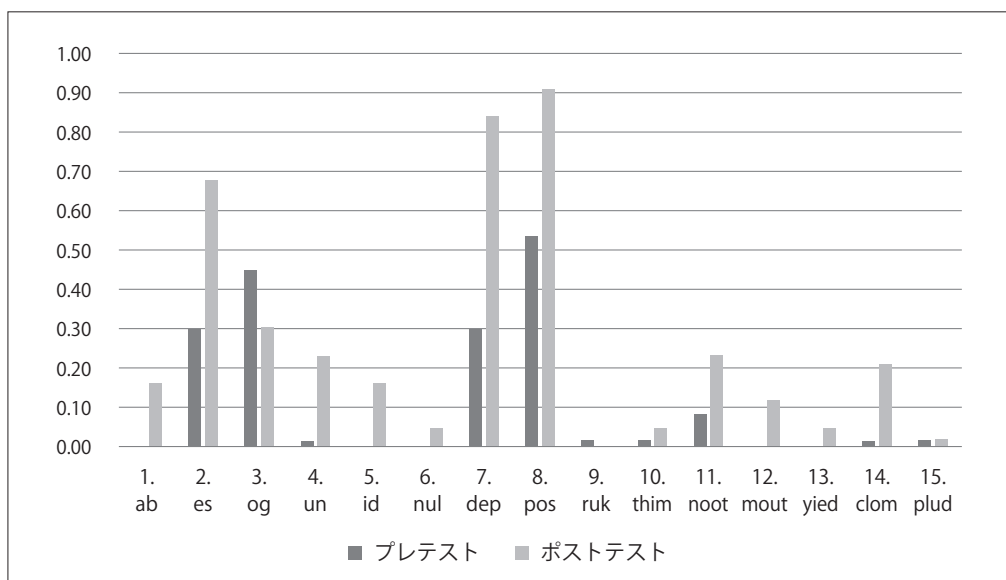


図5 無意味語正答率グラフ

無意味語課題では、ポストテストがプレテストを下回ったのは15問中2問だった。1つ目の og について生徒の解答を見ると、ポストテストでは ogu と u を加えている生徒が多かった。プレテストで u を加えていた生徒は1人しかいなかったのも、ここでもやはりローマ字読みになってしまったのではないかと分析する。しかしながら ogu と解答した生徒の他の問題の解答を見ていくと、同様にローマ字読みをしているものはない。例えばローマ字読みで考えているのであれば、ab は abu、es は esu となっているはずであるが、ogu 以外に子音の後に母音をつけている解答がないことは興味深い。特に g と k は有声音と無声音の違いであるので、ruk は ruku と解答するはずである。さらに有声音という点で考えると id は idu になるはずであるがそれも見られない。他の音でも起こり得る話になってしまうが、授業者である筆者の発音が影響しているのではないかと考える。

ジョリーフォニックスの指導者の中には、Jolly Learning 社が公認しているトレーナーがいる。筆者はジョリーフォニックスの公式トレーナーである山下佳代子『ジョリーフォニックスで初めてのシンセティック・フォニックス授業～トレーニングセミナー編～【全4巻】』を学習してからこの実践に臨んだが、このような結果を見てくるとトレーニングを受講してから実践する方が良いのではないかとも思える。

④ 基礎音（表8、図6）

表8 正答率表

正答率	1. s	2. i	3. p	4. n	5. ck	6. h	7. r	8. m	9. u	10. l
プレテスト	0.92	0.05	0.67	0.57	0.00	0.68	0.40	0.30	0.00	0.22
ポストテスト	0.98	0.60	0.95	0.81	0.84	0.81	0.42	0.84	0.53	0.21

正答率	11. f	12. j	13. ie	14. ng	15. v	16. oo	17. sh	18. th	19. ou	20. er
プレテスト	0.58	0.33	0.00	0.02	0.30	0.55	0.02	0.05	0.00	0.00
ポストテスト	0.91	0.63	0.05	0.42	0.51	0.19	0.40	0.44	0.44	0.07

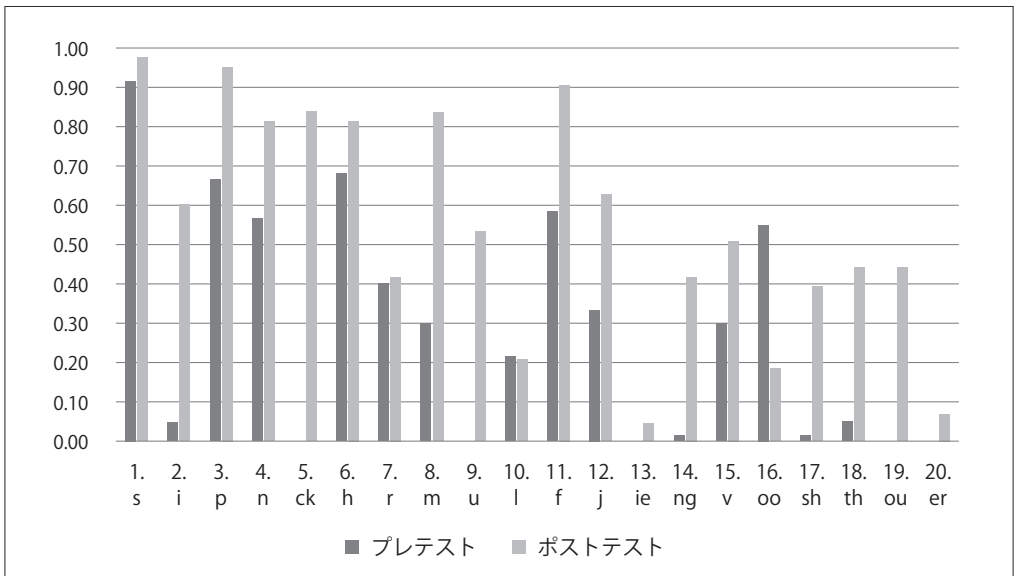


図6 基礎音正答率グラフ

基礎音では、ポストテストがプレテストを下回ったのは20問中2問だった。oo はプレテストでは u の誤答がほとんどだったが、ポストテストではプレテストでは見られなかった um、am など 2 音の誤答が見られた。ジョリーフォニックスの指導では oo の音を、カッコウ時計の動作で体を前に倒す時は短いウの音、体を元に戻す時は長いウーの音と一つのアクションで二つの音を学ぶ。ここで oo には 2 種類あるというより、2 音であると思った生徒がいたかもしれないと考えられる。m の音をジョリーフォニックスでは「お腹がいっぱい」の動作として、口を閉じてお腹をさすりながら「ムー」という音で学ぶ。この「ムー」と伸ばすところが oo の長音と同じと捉えたのかもしれない。いずれにしてもさらに分析するためには、次回の実践の際には、間違えた生徒に実際に発音させるなどして、間違えた原因を分析する必要があると感じた。

もう 1 つの l に関しては、プレテストの正答率は 0.22、ポストテストの正答率は 0.21 と大きな差はなかった。むしろポストテストは実践終了から半年後に実施したのにも関わらず、l 以外の正答率で全てプレテストよりもポストテストの方が高かったことに驚く。やはり単なる知識の詰め込みや単調で機械的に話したり読んだりする活動より、このように絵やお話、動作や歌などの多様な手段を用いる他側面からのアプローチの方が、生徒の多様な認知特性に対応できていると考えられる。

⑤ 文法課題（表9、図7）

表9 正答率表

正答率	1. ○	2. ×	3. ×	4. ○	5. ○	6. ×	7. ○	8. ×	9. ○	10. ×
プレテスト	0.67	0.57	0.70	0.10	0.47	0.17	0.55	0.42	0.48	0.27
ポストテスト	0.77	0.65	0.88	0.86	0.72	0.30	1.00	0.60	0.65	0.49

正答率	11. ×	12. ○	13. ○	14. ×	15. ○	16. ×	17. ×	18. ○	19. ○	20. ×
プレテスト	0.38	0.48	0.17	0.00	0.48	0.35	0.20	0.65	0.40	0.10
ポストテスト	0.47	0.58	0.47	0.60	0.42	0.58	0.63	0.56	0.58	0.23

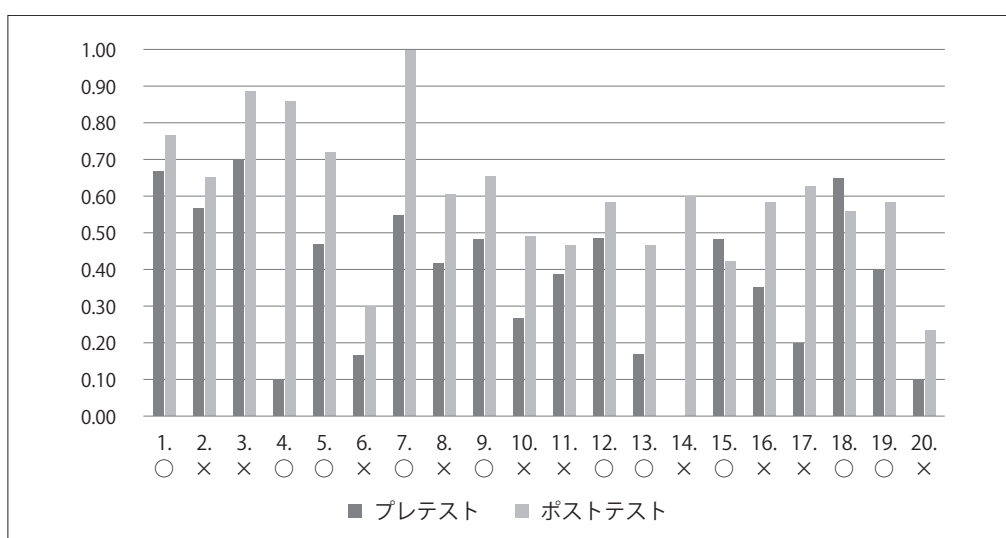


図7 文法課題正答率グラフ

文法課題では、ポストテストがプレテストを下回ったのは20問中2問だった。1つ目は“Why do you like Jane? – Because she is very kind.”で、2つ目は“Can you help me with English homework now?”だった。1つ目の Why に対して Because で答える形は中学校では2年生の学習内容である。また2つ目は Can you は1年生の学習内容であるが、help 人 with の形は2年生の学習内容である。しかしどちらも日常的な表現としてよく使うものであるので、小学校でたくさん使用していたが、中学校では2年生まで扱わないので忘れてしまったのではないかと考えられた。

ジョリーフォニックスは、これまで見てきたように音と文字の結びつきを指導する方法の1つであるので、音と文字の繋がりを学ぶことがこの結果に繋がったかどうかこの段階では断言することはできない。小学校でフレーズとして使ってきたことを文法として中学校で整理することで、文法課題ではプレテストよりポストテストで正答率が上がったことも考えられる。そ

ここでジョリーフォニックスを学ぶことが文法の理解を助けるのかどうかを調べるため、次項では1年次にジョリーフォニックスを学習した学年と学習しなかった学年で、3年次の課題における比較を行う。

(2) 実験群と統制群の比較

ここでは1年次にジョリーフォニックスを実施した学年を実験群、実施しなかった学年を統制群として比較する。比較に用いる課題は英単語課題と英語文法課題である。これらは実験群のプレテストとポストテスト同様に、新潟大学教育学部の加藤茂夫教授から提供されたものを用いた。統制群の生徒は実験群の生徒より2学年上で、静かで落ち着いていて単語などの反復練習を好み、コミュニケーション活動をあまり好まなかった。しかし家庭学習の習慣が身についている生徒が多く、3年次で実施する実力テストで、常に実験群と比較すると英語の平均点は20点ほど高くなっていた。

① 英単語課題（表10、図8）

表10 英単語課題

問題	選択肢 1	選択肢 2	選択肢 3	選択肢 4	選択肢 5	選択肢 6
1. あなた	tape	three	you	green	we	nine
2. 数字の「3」						
3. 朝食	lunch	November	October	summer	breakfast	team
4. 10月						
5. 考える	sing	open	fool	think	wait	close
6. 閉じる、閉まる						
7. いくつかの	many	right	kind	some	light	tired
8. 正しい						
9. 午後	century	afternoon	year	dinner	evening	month
10. 世紀、100年						
11. 滞在する	try	stay	throw	remember	fly	smile
12. 思い出す						
13. どちらの	older	junior	which	where	little	there
14. 年下の						
15. ～しても良い	far	little	near	must	can	may
16. 遠くに						
17. 理由	problem	reason	answer	fence	road	way
18. 方法						
19. 重要な 20. 疲れて	tired	quiet	interesting	important	crying	sad
21. 送る	return	move	send	touch	bring	pass
22. 持ってくる						
23. ～の後ろに	never	after	ago	behind	before	ever
24. 決して(一度も)～ない						
25. 息、呼吸	force	needles	brush	peace	breath	thumb
26. 親指						
27. 無駄にする	waste	hide	decide	create	wait	fail
28. 隠す						
29. 経験	population	exercise	experience	explanation	pleasure	government
30. 人口						

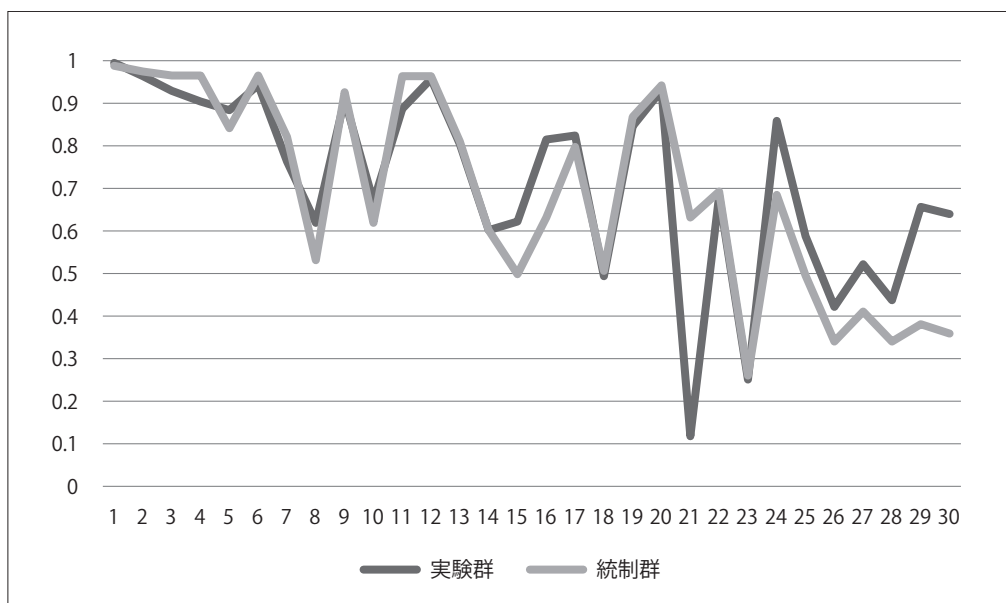


図8 英単語課題正答率

英単語課題は30問あり、日本語の意味を見て「分からない」を含む7個の選択肢の中から正しいと思う単語を選ぶ課題である（表10）。実験群と統制群の正答率を比較したグラフ（図8）を用いて分析していく。15個の問題で、実験群が統制群の解答率を上回った。これは実力テストの結果から考えると健闘したと考えられる。その中でも特に大きく上回ったものは、「15. ～しても良い」、「16. 遠くに」、「29. 経験」、「30. 人口」である。これらは実験群の方が統制群より20%ほど正答率が高かった。「15. ～しても良い」と「16. 遠くに」はそれぞれ may, far と3つの音からできている。特に「15. ～しても良い」は日本語ではあまり使わない表現であり、生徒にとっては覚えづらい単語である。しかしそれぞれ /m/a/y/, f/a/r と音に分ければ1音ずつ分けやすいので、音と文字の結びつきを学んだ実験群の方が記憶に残りやすかったのかもしれない。同様に「29. 経験」と「30. 人口」は長い単語であり、中学生からは敬遠されてしまう。しかし、これも音節に分けることで、音と文字と組み合わせることが容易になったのではないかと考える。実力テストでは劣勢を示していた実験群ではあるが、英単語課題で正答率が統制群より20%以上低かった単語はなかった。

② 英語文法課題（表11、図9）

表11 文法課題

1. Where is your house? – It's in Nagaoka city. ()
2. How many book do you have? – I have twenty books. ()
3. Takashi can play the piano. ()
4. What is Ken doing? – He is studying math now. ()
5. Last year, I visited at Kyoto with my family. ()
6. Tomorrow is Ken's birthday. I will give to Ken a new notebook. ()
7. When my father comes home, I was watching TV. ()
8. If it will be fine tomorrow, let's play softball. ()
9. My bag is as larger as yours. ()
10. In our class, baseball is the most popular of all the three sports. ()
11. Ken went to the park to playing basketball with his friends. ()
12. How many languages are spoken in Canada? – Mmmm. I have no idea. ()
13. Have you ever hear of her new friend from Canada? – No, I haven't. ()
14. The largest animal to living on land is the elephant. ()
15. This is a movie that makes people happy. ()
16. Kumi has lived in England in three years. ()
17. It is difficult for me to explain *Kendama*. ()
18. My parents want for me to study English every day. ()
19. Could you tell me how to get to the Urasa station? – Yes, of course. ()
20. I don't know why Ken is so happy today. ()

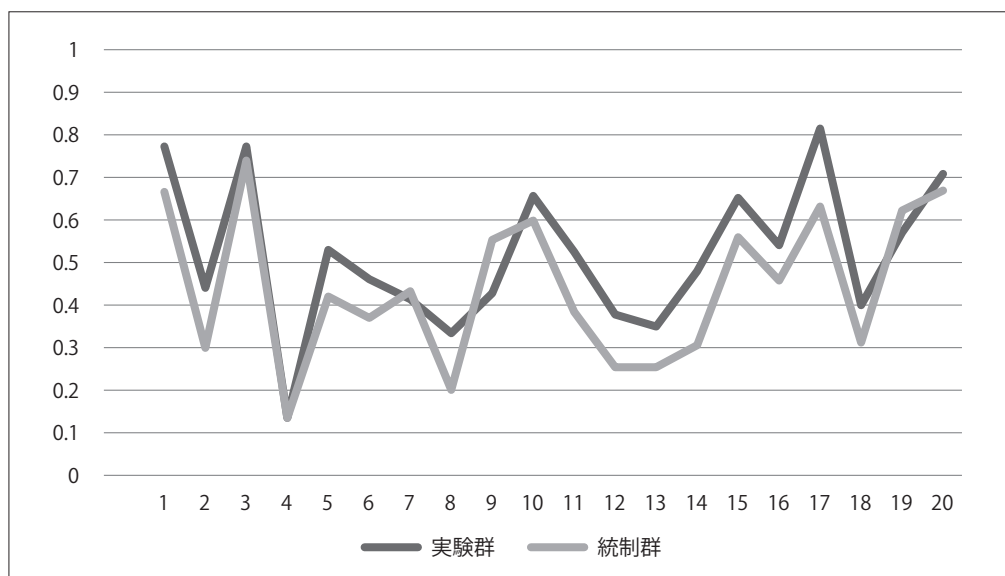


図9 英語文法課題正答率

英語文法課題は実験群が1年次に行ったプレテストとポストテストと同じ形式で作られている(表11)。文法の正しい文だと思ったら文末の()内に「○」印を、正しくないと思ったら()内に「×」印を書き入れ、「×」を書き入れた文については間違っていると思った部分に下線を引くものである。また「○」か「×」か判断できない(よく分からない)場合には、()内に「?」を書き入れた。

図9は正答率の割合である。英文法課題の正答率では、20問中の16問で実験群が統制群を上回った。本実践では基本の42音を扱ったのみなので、「ひっかけ単語」と呼ばれるような特別な音と文字の関係は扱っていない。また帯活動として行っていたので教科書を学習するときに、新出単語で発音しづらそうなものがあるとき以外は、ジョリーフォニックスを特別に意識させるようなことはあまりなかった。おおむね実験群が統制群を上回ってはいるが、それほど大きな差があるわけではない。機械的に「音と文字」の結びつけて覚えるのではなく、視覚、聴覚、運動覚など多感覚を活用して学び、さらにそれぞれにはストーリーがあるので、生徒が理解しやすく記憶に残り、それが文法を学ぶ際にも活かされるのかどうか。ジョリーフォニックスを学ぶことで知らない単語が出てきたときにも読み方が予想できることで、「教えてもらわないと読めない」「1人では勉強できない」という不安も減って安定して英語学習に取り組むことができたのではないかと推測はできるが、それが文法的な面での英語力の向上にどの程度結びついているのか、この点は今後の課題と言える。

4.3 生徒の感想

(1) アンケートの分析

ジョリーフォニックス終了後にアンケートを行った。アンケートは6項目で、生徒はジョリーフォニックスの学習についての楽しさと好きかどうかを「とても当てはまる、少し当てはまる、あまり当てはまらない、まったく当てはまらない」の4件法で回答し、ジョリーフォニックスの学習の中で一番楽しい(好き)なものと英語を使って一番できるようになりたいことを選択肢の中から選び、そしてジョリーフォニックスの学習を始めてからできるようになったことと、ジョリーフォニックスの学習を始める前と後で英語を学習するときに変わったことを記述で回答した。

1. あなたはジョリーフォニックスの学習が好きですか。

48 件の回答

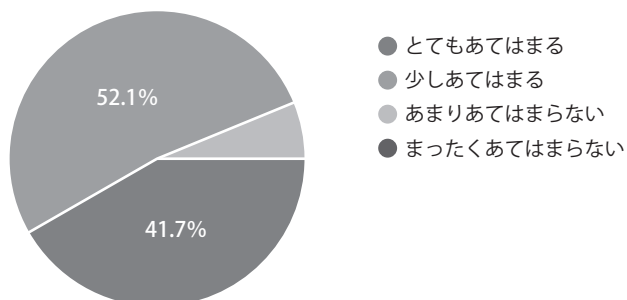


図10

2. あなたはジョリーフォニックスの学習をすることが楽しいですか。

48 件の回答

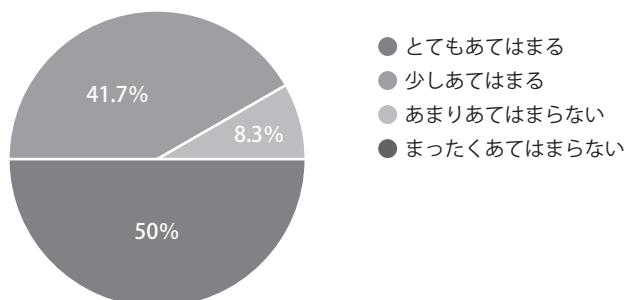


図11

3. あなたはジョリーフォニックスの学習の中で、どれが一番好き（楽しい）ですか。

48 件の回答

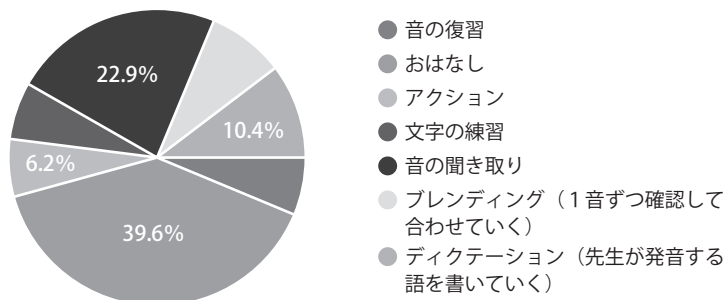


図12

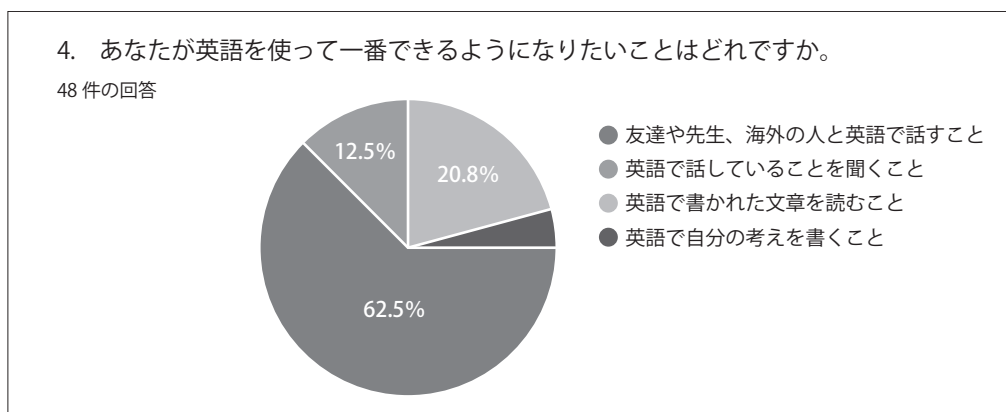


図13

1つ目の「ジョリーフォニックスの学習が好きか」という質問に対する回答は図10ようになった。41.7%の生徒が「とてもあてはまる」と回答し、52.1%の生徒が「少しあてはまる」と回答したので、合わせると93.8%の生徒が肯定的な回答をしている。「あまりあてはまらない」と回答した生徒は6.3%で「まったくあてはまらない」と回答した生徒は1人もいなかった。中学1年生ということもあり、恥ずかしそうに動作をしている生徒も見られたが、多くの生徒から肯定的な回答を得ることができた。その大きな要因の1つは、多感覚を用いる確立されたプログラムだと考える。多感覚を用いる学習方法が多様な生徒に対応することができ、一人一人の中に「できた」「わかった」という実感を持たせることで学習が好きになり、もっと頑張ろうとする意欲に繋がるのではないかと考える。

2つ目のジョリーフォニックスの学習をすることが楽しいかという質問に対する回答は図12ようになった。50%の生徒が「とてもあてはまる」と回答し、41.7%の生徒が「少しあてはまる」と回答したので、合わせると91.7%の生徒が肯定的な回答をしている。「あまりあてはまらない」と回答した生徒は8.3%で「まったくあてはまらない」と回答した生徒はここでも1人もいなかった。これだけ多くの生徒が楽しみながら学習に取り組むことができたことも、やはり「好き」かどうかと同じく多感覚を用いるプログラムのおかげだと考える。

3つ目の「ジョリーフォニックスの学習の中でどれが一番好き（楽しい）か」という質問に対する回答は図13ようになった。一番人気があったものは「おはなし」で39.6%の生徒が一番好き（楽しい）と回答した。二番目は「音の聞き取り」で22.9%の生徒が一番好き（楽しい）と回答している。三番目は「ディクテーション（先生が発音する語を書いていく）」で10.4%、それ以降は「ブレンディング」が8.3%、「音の復習」と「文字の練習」と「アクション」がそれぞれ6.2%と同じ割合であった。授業を振り返ると、この数値は納得できる。「おはなし」で

はモニターに絵を写すだけで「～がいる」、「今日は～という文字だ」、「今日の主人公は～きつと～という名前」だと、とても楽しそうに話していた。そして、お話を通してイギリスと日本の文化の違いにも気づき、とても興味深そうだった。例えば、aの文字はピクニックのお話だが、絵にはピクニックシートに座った家族がパンにジャムを塗っている。そこで生徒に日本のピクニックと比べるとどうかと問いかけると、日本ではお弁当を作って持っていくと答える。そこから海外ではこのように素材だけを持って行って食べる直前に調理すること、そしてイギリス出身のALTも昼食の時は教務室でこのように昼食の準備をしていることを伝えるととても驚く。さらに日本の弁当は、“bento”として世界でも広がっていることなどを伝えると、生徒が最も身近である食文化から、さらに多くの文化的事象へと考えを広げることができる。

4つ目の「英語を使って一番できるようになりたいことはどれか」という質問に対する回答は図14ようになった。62.5%の生徒が「友達や先生、海外の人と英語で話すこと」、20.8%の生徒が「英語で書かれた文章を読むこと」、12.5%の生徒が「英語で話していることを聞くこと」、そして4.2%の生徒が「英語で自分の考えを書くこと」と回答した。「話すこと」と回答する生徒が一番多くなることは予測がついたが、「書くこと」と回答する生徒がここまで少ないことは想定外だった。「話すこと」も「書くこと」も発信能力であるので、中学1年生ということもあり、まずは「話したい」という思いが大きいのではないかと考える。

5つ目の「ジョリーフォニックスの学習を始めてから、できるようになったこと」の自由記述には様々な回答があった（表12／原文まま）。

表12

読むことに関すること	初めて見る単語も習ったことを使って読めたこと。
	英文を習った読み方で読める
	わからない単語もだんだん読めるようになった。
	先生や友達と話したり、発音がしっかり言えるようにできました。
	読み取る事
	いろんな単語を読めるようになった
	簡単な文や単語を読めるようになったこと。
	学習を始める前と比べて少し英語の文を読めるようになってきた
	文を読めるようになった。
	単語を読む・短い文章を読む
	知らない単語が読めるようになった
	なんて書いてあるのかを少しわかるようになった
	英文を読むこと

発音に関すること	発音の正しい方法が理解できた
	音の発音の仕方が詳しくわかった、発音がよくなった
	一文字一文字の発音、発音する時の口の形など、英語の発音
音に関すること	一音一音の音と単語を覚えた。
	単語を音で分解することがちよつとできるようになった
書くことに関すること	単語をまあまあ書けるようになった
	聞いて書けるようになったこと
	英語を書けるようになった
	単語や文字をあまり間違えないようにかけた
	少しだけ何が書いてあるかを書ける
話すことに関すること	言葉をちよつとだけ喋れるようになった
	英語での話しがしやすくなった。
聞くことに関すること	音を前より少し聞き取れるようになり、読めるようになった。
	音の聞き取りなど、聞き取りが少し出来るようになった
	何を言っているか分かる様になってきて英語が楽しくなってきた
音と文字の関係に関すること	その文字のアクションを覚えて単語を読めるようになった
	ローマ字読み以外もできるようになった
	学習する前は、ローマ字読みで読んでたけど、英語のアクションが分かって、単語が分からなくても、思い出して単語が読めるようになった事です。
	ジョリーフォニックスのアクション
	一文字一文字のアクションを重ねて言葉がわかるようになること
	ローマ字読みだけでなく英語も少し読めるようになった
その他	使える単語が増えた
	英語がわかりやすくなったこと

このように筆者としては「音と文字の関係」を教えていたつもりだが、生徒は音と文字の関係だけでなく、そこからさらに「読めるようになった」や「書けるようになった」と感じていることが分かる。このことが前述した統制群との英単語課題や英文法課題との差に繋がっているとも考えられる。それは、英語が日本語とは違い、表音文字のためかもしれない。生徒の声を分析することで、数値だけでは見えなかったことが見えてくる。そして、ジョリーフォニックスを学習することは、音と文字の関係だけでなく、生徒の様々な英語力を高める可能性があると感じる。

6つ目の「ジョリーフォニックスの学習を始める前と後で、英語を学習するときに変わったことはありますか。」の自由記述にも様々な回答があった(表13/原文まま)。

表13

発音や音に関すること	アクセントをつけるかつけないか
	発音がよく聞けるようになった
	単語を音で分解して書くことがちょっとすることができる
	音を当てはめることができるようになった
	発音の仕方
	前は、発音が少し悪かったけど、学習をしたら発音がよかった
	単語などどのように話したらいいのかがわかってくる。
読むことに関すること	英文が読みやすくなった。
	いろんな単語を読めるようになった
	単語の読み方がわかるようになった。
	さらに英語を読めるようになったこと。
	単語が読みやすくなった
	英語が読めるようになった
話すことに関すること	前よりスラスラ英語が言えるようになった
	英語で話せる言葉が多くなった。
	英語を話せるようになった
書くことに関すること	文字の書き方など
	話していることを英語で書くこと
聞くことに関すること	聞き取りをする時に前に比べてしっかりと出来るようになった
読み方に関すること	ローマ字読みをやめたこと
	ローマ字読みが少なくなって、文を読んだりすることができた。
	最初は全然読めなかったのにジョリーフォニックスを通して読めるようになった
その他	少しだけ英語に興味を持った。
	英語に少し慣れました。
	英語の理解力が変わった
	分からないところも、思い出して分からないところも、分かるようになりました。
	アクションが楽しめる!!!!
	どういった時に使うか
	わかる単語が増えた
	楽しいと思うことが多くなった。
	文章問題が解きやすくなった
	英語をするのが楽しくなった。

ここでもやはり生徒は「音と文字の関係」だけでなく、ジョリーフォニックスの活動を通して様々なことを学んだことが分かる。また発音や話すことや読むことなど学習に関することだけでなく、「少し慣れた」や「興味を持った」など生徒の意欲も引き出していることが分かる。また「どういったときに使うのか」という生徒のコメントから、学習指導要領でも重要視されている「場面・目的・状況」に関してもジョリーフォニックスの指導が有効であることが分かる。単語や文を「場面・目的・状況」から切り離して学んでも実際の場面で活用はできない。しかしこのコメントから、ジョリーフォニックスだけでなく、お話を通して学習することは「場面・目的・状況」を自然と意識するために有効であると考えられる。

(2) 振り返りに見られた感想

毎時間の授業で書かせている振り返りシートの自由記述にジョリーフォニックスについて書かれたものの一部を紹介する（表14／原文まま）。一番初めに学習する s は生徒にとっても分かりやすく新鮮であり、ある意味で衝撃的な時間になる。ここでまず生徒に「ジョリーフォニックスはおもしろそう」と思わせることが大切である。また生徒の振り返りから、n や ie のように特に難しさを感じるものがあることが分かる。ジョリーフォニックスのプログラムでは、最初に「音の復習」が入っている。振り返りシートの中にジョリーフォニックスに関する項目を入れることで、生徒が難しさを感じた音については手厚く復習し、より定着を図ることができる。

表14

s	s の音について初めて知りました。 s はスーという音だった。 s の音を詳しく聞くことができました。 アルファベットには呼び名以外にも音があるのが分かった。 s という字をなんと読むか分かりました。 今日は「s」の発音は「スー」ということが分かりました。s でも発音が違うと分かりました。 s の音を繰り返し聞いて、どんな発音をしたらいいのか分かった。
a	a の読み方が分かるようになりました。これからいろいろな文字が出るので習った字を忘れないようにしたいです。 s と a の音をカンペキにした。 音を繰り返し聞いて a の音をくわしく聞き取ることができました。これからは忘れずに a,s の音を覚えていきたいです。 英語の音は覚えやすいなぁと思いました。 a の発音の正しいやり方を覚えた。 英語の発音が分かるようになった。 a の発音をしました。「アッ」と言うことができました。 a の発音はアリをよける時の音だと分かった。

t	t の発音の仕方が分かった。 t の発音がしっかりできるようになりました！ t という時にのどがふるえているので、がんばって練習する。 うまく t を発音できてよかった。 今日は新しく t の音を聞きました。 のどがふるえなければちゃんと発音できているということを知ることができました。 t の発音の仕方とのどの振動がおもしろかった。 英語の音を覚える時に動きをつけて覚えられるからとても覚えやすいし、思い出しやすい。
c,k	音の復習が増えて前より難しくなってきた。これからもがんばりたい。 今日は c,k の発音をしました。どちらも同じだと分かりました。
n	n と m の音の区別が難しいなと思った。 今日は n の音を学習して n と m の音が間違える時があるので、気をつけたいです。 n の音はとても難しかったです。 日本語の「ん」と英語の n は口の開き方が違うことが分かりました。
h	h は「ハッ」ということが分かった。
g	g は苦手だったけどうまく書いてよかった。他の苦手な文字もがんばろうと思う。次の授業が楽しみ。
ie	ie でアイと発音するのは間違えやすそうだなと思った。
ee/or	連続だと違うので気をつけたいです。

おわりに

ジョリーフォニックスを授業に取り入れることで、多くの成果があることが分かった。まず 1 つ目は、ジョリーフォニックスの学習効果が、学習終了後も続くことである。このことは、プレテストと半年後に行ったポストテストの比較からも分かるが、統制群と比較した単語と文法課題は学習終了後 2 年と 2 ヶ月が経過してから行ったので、効果が長く続く可能性が考えられる。そして 2 つ目は、音と文字を学ぶことで単語力だけではなく、文法力にも効果がありそうなことである。生徒の記述も見ると、教える側は「音と文字の関係」を教えていたつもりだが、生徒は「読めるようになった」、「書けるようになった」と様々なことを学んでいた。これはやはり、表音文字というところを活かしたジョリーフォニックスのおかげである。音と文字の繋がりという、英語と日本語の大きな違いに目を向けることの重要性が表れている。生徒一人一人、学びを身につけるために用いる感覚は異なる。視覚・聴覚・運動覚など多感覚を用いることで何かしらがそれぞれの生徒に当てはまり、「できた」「分かった」という実感をもって学び続けることができるのではないだろうか。このような実感が学ぶ意欲にも繋がり、学習を進めていく中で初めての単語や文に出会った時も、音と文字の関係から読み方などを推測しながら学習を進めることができる。

このようにジョリーフォニックスは生徒の学習意欲という面からも大きな可能性を秘めていると考える。しかしながら、実践するためには、当然ながら事前に指導者に学びの必要があり、先行する実践例の共有や経験に基づいた十分な準備も必要となる。認定トレーナーになろうとするとそれなりの時間と費用がかかるため、ジョリーフォニックス導入のハードルを上げる一因となっているとも思われる。公立初等・中等教育のカリキュラム的にも予算的にも限られた中でこの指導法を活かしていくためには、教育委員会が先導したり、より多くの教員が実践して成果を共有したりしていくことも重要である。

参考文献

- 入山満恵子・加藤茂夫・渡辺さくら・山下桂世子 2019「日本語を母語とする中学生への効果的な英語学習法の検討ー統合的フォニックスの活用ー」、『LD 研究』第28巻、pp. 262-272
- 入山満恵子・加藤茂夫・渡辺さくら・山下桂世子 2020「ジョリーフォニックス指導効果検証の試みー新潟県南魚沼市の取り組みからー」、『小学校英語教育学会誌』20巻、pp.272-287
- ジョリーラーニング 2017『はじめてのジョリーフォニックス』、東京書籍
- ベネッセ教育総合研究所 2023『小学校英語に関する調査研究』、ベネッセコーポレーションベネッセ教育総合研究所
- 松浦伸和 2005「入門期におけるローマ字力と英語学力の関係」、『日本教科教育学会誌』第28巻、pp. 81-89
- 村上加代子 2015「英語の学習初期における読み書き指導の在り方の検討ー基礎的な力としてのデコーディングと音韻意識スキル獲得の必要性について」、『神戸山手短期大学紀要』58号、pp. 53-73
- 文部科学省 2017 小学校学習指導要領（平成29年度告示）解説 外国語活動・外国語編
- 山下佳代子 2019『ジョリーフォニックスで初めてのシンセティック・フォニックス授業〜トレーニングセミナー編〜【全4巻】』（DVD）、ジャパンライム株式会社
- 湯澤正通・湯澤美紀・関口道彦・李思嫻・齊藤智 2010「英語の多感覚音韻認識プログラムが日本人幼児の英語音韻習得に及ぼす効果」、『教育心理学研究』第58巻、pp. 491-502
- Jolly Phonics <https://www.jollylearning.co.uk/become-an-official-jolly-trainer/>（最終アクセス2025年5月26日）

註

- 1) ベネッセ教育総合研究所 2023
- 2) 入山満恵子ほか 2019、p. 262
- 3) 湯澤正通ほか 2020、p. 492
- 4) 入山満恵子ほか 2019、p. 263
- 5) 村上加代子 2015、p. 58-59
- 6) 前掲書、pp. 58-59
- 7) 入山満恵子ほか 2019、p. 263
- 8) 入山満恵子ほか 2020、pp. 275-276
- 9) ジョリーラーニング 2017、pp. 14-15
- 10) 松浦伸和 2005、p. 88
- 11) 文部科学省 2017、pp. 45-46